



2016.11
vol.202

(学園祭2016 9/10)



節を刻む、あなたとなれ。

学校長 飯山 等

最近読んだ本(徳永進著『どちらであつても臨床は反対言葉の群生地』)に、心理学者の河合隼雄さんが話されたというこんな話が紹介されていた。

「夜、闇の中、漁船が行き先を見失う。

船員が必死に灯りをつけるが方向が見えない。その時老練の漁師が言う。「灯りを消せ」。真っ暗になる。闇に慣れてくると、遠くにポーと町の灯りが浮かぶ。明るさの中で見えなくなり、闇の中で見えてくるものがある。」

私たちはともすれば、常に光の中にあろうとし、また自らの手に灯りを持ち、行く道を照らし出そうとする。しかし、その光ゆえに、手にする灯りゆえに、見えなくしていることがありはしないか。灯りを消せ! 闇のなかに遠く微かな灯りが浮かぶ。自分へ集中する目が転じられる。自分を離れたところから此方を照らす光があることに気づく。自分を中心点として描く世界が転ぜられて、その光の照らす世界の中に私が見出される。悩みがもし闇だとしても、その闇の中でこそ見えてくるものがある。自らに光を喪失して、はじめて気づく灯りがある。

「人間とは何か、それを考えながら日本で、アフリカで、チンパンジーと寄り添うようにして研究を続けてきた」というチンパンジーの心の研究者である松沢哲郎さんが、「遺書のつもりで書いた」という著「想像する力」(岩波書店)の中で、「浅き川も深く渡れ」ということばがある。字義通りにとれば、慎重にふるまいなさい、という意味だろう。一見すると浅

く見える川も、実際には思いのほか深いことがある。だから、足を取られて流されないように慎重に歩きなさい、という意味である。しかし、このことばは私には少し違ったニュアンスに聞こえる。一見すると何気なく見過ごすもののなかに、実際には深い意味がひそんでいることがある。だから、浅いと見えるものも深く味わってみなさい、という意味に受け取れるのだ。と、その研究人生が教えてくれた大切なことを述懐されている。「寄り添うようにして」という研究(=inspect…内に入って観る)の真情なればこそ、汲み取ることができ得たチンパンジーのこころ。心を持つ者として、接し応ずることによってはじめて見えてきた対者の真実である。「浅いと見えるものも深く味わってみなさい」とのことばを、自身にしかと聞き受けて、私の測りと慮りを捨てて、対者に寄り添い、謙虚に、深く味わう。そのとき初めて対者はその真実のすがたを現すのだろう。

この大谷の時と場とを、深く味わうか、浅く通過するか。学園祭、演劇コンクール、体育大会と沸き立つような熱い時が過ぎた。それらは決して忘我の熱狂に終わってしまうものではない。本気だけが味わうことのできる喜びと悔しさを感じた君には、良き友が新しく生まれ、新たな私の発見があったのではなからうか。《私》の中に新たな《私たち》という感覚が生まれ、《私》が、その《たち》の中に見出される。それは時間が経たないと見えてこないことかもしれない。立ち止まる。立ち竦む。その一つひとつを大事にしよう。大谷が君によって更新される。君の胸の鼓動を大谷も聴いている。